

シュツットガルト世界選手権大会におけるゆか運動についての一考察  
——種目別選手権大会上位入賞者と日本選手の比較を中心として——

中山光子・中山彰規

**Comparison of performance between Japanese gymnasts and prize  
winners of the world gymnastics championship**  
—— example of Stuttgart World Competition of Gymnastics ——

Mitsuko Nakayama and Akinori Nakayama

By comparing the performance between World Top Gymnasts and Japanese gymnasts, the following were revealed :

- 1) BOGVINSKAIA and SLIVAS getting 10.00 points seemed to deserve to be champion, because BOGVINSKAIA had her own characteristic movements and high quality balanced performance of series. SILIVAS, on the other hand, had high degree of rythmical movements.
- 2) Among the Japanese gymnasts, SHINODA got 9.837 and her performance seemed to give a good example with regard to getting a high score for Japanese gymnasts in the future.
- 3) Prize winners executed much more D technigue than Japanese gymnasts and they got as a result much more additional points.
- 4) Many Japanese gymnasts had mistaken at landing stage and this made their points very lower.
- 5) To execute the most difficult movements does not mean necessarily to be able to get a higher point. When a gymnast show a good mixture of movements, she will have a good evaluation.

## I 研究の目的

近年、日本の女子体操の競技レベルは非常に高くなってきている。しかし日本の技術力の向上を常に上回って、外国のそれがあるといえ、オリンピック大会、世界選手権大会において、日本選手が団体で10位以内にはいるのもきわめて困難である。日本が再び上位入賞をはたすためには、今後どのようにしていくべきであろうか。本研究では1989年ドイツのシュツットガルト市で行われた世界選手権大会ゆか運動で上位6位までに入賞した選手と、日本選手の演技構成、内容を調査し、技の難易度別分布などを

比較検討することにより、今後における競技力向上のための資料を得ることを目的としている。

## II 研究方法

本研究では、1989年の世界選手権大会の種目別選手権大会において、1位から6位までに入賞した選手6名と、同大会に日本代表選手として出場した6名を対象に演技内容を調査した。日本選手のうち、信田選手については個人総合選手権におけるゆか運動を、他の5人の選手については団体総合選手権の自由演技を調査した。この調査には日本体操協会発行のビデオ

テープ<sup>1)</sup>を用いた。またその演技内容は国際体操連盟女子競技委員会により考案されたシンボルマークで表示することにした。シンボルマークにより各国共通語として、言葉の不自由さを解決することが出来た。

### III 結 果

表1は、それぞれのシンボルマークによって示される技と、その難易度について表したもの

である。アルファベットの横に記した数字は独自の加点といい、国際体操連盟により、技そのものに与えられる点である。表2は、ゆか運動における採点規則<sup>2)</sup>を示したものである。体操競技は加点の0.4を含めて10点から減点法により採点される。ここに記した以外にも細かい規則が定められている。表3は種目別選手権に入賞した6名(以後入賞者と記す)とこの大会に出場した日本選手6名のゆか運動における技

表1 シンボルマークの技と難度, 加点

シンボルマーク	難 度	説 明	シンボルマーク	難 度	説 明	シンボルマーク	難 度	説 明
	A	(跳躍) 片足ふみきり前後大開脚とび		A	(ひねり) 片足で1回ひねり		A	後転とび
	A	片足ふみきり前足をまげた前後大開脚とび		A	アチチュートでの1回ひねり		A	後転とび $\frac{1}{2}$ ひねりから座
	A	片足ふみきり後足をまげた前後大開脚とび		C	片足上で2回ひねり		A	アウニルバック後転とび
	A	片足ふみきり前後足をまげた前後大開脚とび		(倒立)	(倒立)		B	座から後方倒立回転1回ひねり
	A	両足ふみきり前後大開脚とび		A	前とび倒立		B	1回ひねり後転とび
	A	両足ふみきり前足をまげた前後大開脚とび		A	頭支持倒立 $\frac{1}{2}$ ひねり		C	座から倒立2回ひねり前方倒立回転
	A	両足ふみきり前後足をまげた前後大開脚とび		C	倒立2回ひねり		(宙返り)	
	A	両足ふみきり前脚をまげた前後大開脚とび $\frac{1}{2}$ ひねり		A	前転		A	前方かかえこみ宙返り
	A	伸身とび1回ひねり		A	とびこみ前転		A	後方伸身宙返り
	A	とびあがり1回ひねり		A	後転倒立		A	テンボ宙返り
	B	片足ふみきり大開脚とび $\frac{1}{2}$ ひねり		A	(倒立回転)		B	後方伸身宙返り1回ひねり
	B	前後足を内側にまげた大開脚とび $\frac{1}{2}$ ひねり		A	前方倒立回転		C	後方伸身宙返り $1\frac{1}{2}$ 回ひねり
	B	片脚前ふりあげ開脚のまま1回ひねり		A	後方倒立回転		C	後方伸身宙返り2回ひねり
	B	ねことび1回ひねり		A	前後方倒立回転		D <sub>0.1</sub>	後方伸身宙返り $2\frac{1}{2}$ 回ひねり
	B	片脚をのばして前にふりあげたかかえこみとび1回ひねり		A	座から後方倒立回転		D <sub>0.2</sub>	後方伸身宙返り3回ひねり
	B	はさみとび1回ひねり		A	前転とび		D	後方かかえこみ2回宙返り
	B	左右大開脚とび		A	片足ふみきり前方伸身宙返りから座		D	後方屈身2回宙返り
	B	脚交差前後大開脚とび		A	座から側方倒立回転		D <sub>0.2</sub>	後方伸身2回宙返り
	C <sub>0.1</sub>	後方に前後開脚とびして、上体を後方に反らして後方へ $\frac{1}{2}$ ひねり		A	片足ふみきり側方伸身宙返り		D <sub>0.2</sub>	後方伸身から屈身2回宙返り
	C <sub>0.1</sub>	伸身とび1回ひねりしながら、片脚を前にひきあげついで後方に開く		A	ロンダート		D <sub>0.2</sub>	後方かかえこみ2回宙返り1回ひねり
	C <sub>0.2</sub>	後方上向き転向とび連続2回		A			D <sub>0.2</sub>	後方屈身2回宙返り1回ひねり

表2 採点規則

最低要求難度	競技 I b	競技 II	競技 III	一つの難度点	演技に対する要求	価値部分 3.00 加点 0.40 構成 1.50 実施 5.10 合計 10.00	加 点	独創性 余分な単独D	最大0.3 最大0.1 最大0.4
	3 A 3 B 2 C (1 Cは単独C)	1 A 2 B 2 C (単独C) 1 D	2 B 1 C (単独C) 2 D (格上げでもよい)						
演技の構成要素	<p>○演技は異なった要素グループから構成されるべきである</p> <p>○B, C, Dの価値部分は少なくとも次の要素グループから構成されなければならない</p> <p>ー前方, 側方, 後方の空中局面を伴う, または伴わないアクロバット系の要素</p> <p>ーひねりと転向, 大小の跳躍, 歩と走の組み合わせ, 立位, 座, 臥位でのバランスの要素, 腕や振動や体の波動等の体操系の要素</p>								
種目特有の要求	<p>○3つの要素を含む1つの体操系シリーズ</p> <p>○1つの体操系の“B”</p> <p>○1つの体操系とアクロバット系の直接の組み合わせ</p> <p>○B以上の終末技</p> <p>○3本のアクロバット系シリーズ(空中局面を含む)が必要である</p> <p>○3本のアクロバット系シリーズは異なっていること</p> <p>○3本のうち1本は2つの宙返り, もしくはDの宙返りを含むこと</p> <p>○3本のうち2本は異なった宙返りがいっていること</p>								

表4 演技の難度

順位	名前	得点	開始技から第2シリーズの前まで	第2シリーズから第3シリーズの前まで	第3シリーズから終了まで
1	ボギンスカヤ	10.000	(AAD <sub>0.2</sub> )(BAB)	(AC <del>A</del> D <sup>+</sup> )	( <del>A</del> D <sub>0.1</sub> )( <del>A</del> B)C
1	シリバンシュ	10.000	(AAAA <del>D</del> <sub>0.2</sub> ) <sub>0.1</sub> (AC <sub>0.1</sub> )A(CA)	( <del>A</del> CB <sup>+</sup> <sub>0.1</sub> <del>A</del> <del>A</del> D <sup>+</sup> )(BC <sup>+</sup> C <sub>0.1</sub> )	( <del>A</del> D) <sub>0.1</sub>
3	ボンタシュ	9.962	(AAD <sub>0.2</sub> )(BAC)(AA)	(AAD <sub>0.2</sub> <del>A</del> B <del>A</del> <del>A</del> D) <sub>0.2</sub> B( <del>A</del> A)	( <del>A</del> <del>A</del> <del>A</del> D) <sub>0.2</sub>
4	デュドニク	9.950	(AAD <sub>0.2</sub> )A(ABA)	( <del>A</del> D <sub>0.1</sub> B <sup>+</sup> <sub>0.1</sub> BA)A(BAC)( <del>A</del> <del>A</del> <del>A</del> <del>A</del> )	( <del>A</del> D) <sub>0.1</sub>
5	チェン	9.912	(AAAA <del>A</del> D <sub>0.2</sub> ) <sub>0.1</sub> (BC <sup>+</sup> C <sup>+</sup> )A	( <del>A</del> <del>A</del> <del>A</del> <del>A</del> D) <sub>0.1</sub> ( <del>A</del> BA)CA	( <del>A</del> D) <sub>0.1</sub> (BA)
6	マフロディエバ	9.825	(AAD <sub>0.2</sub> )(AB)(AB)(AABA)(AA)	( <del>A</del> <del>A</del> D) <sub>0.1</sub> C <sub>0.2</sub> A	( <del>A</del> D <sub>0.2</sub> ) <sub>0.1</sub> A
	信田	9.837	(AAD <sub>0.2</sub> )C(AB)	( <del>A</del> <del>A</del> AC)C(BAA)	( <del>A</del> AB <sup>+</sup> )( <del>A</del> <del>A</del> D) <sub>0.1</sub>
	河田	9.400	A(AAD <sub>0.2</sub> )(BC <sup>+</sup> A)B	( <del>A</del> <del>A</del> AD) <sub>0.1</sub> ABA	( <del>A</del> AD) <sub>0.1</sub> <del>A</del> B <sup>+</sup> AA
	真田	9.362	(AAD <sub>0.2</sub> )C(AAB)	(AAD <sub>0.2</sub> )( <del>A</del> <del>A</del> A)A(CA)	( <del>A</del> <del>A</del> D) <sub>0.1</sub>
	森村	9.200	(AAD <sub>0.2</sub> )CA	( <del>A</del> <del>A</del> AB <sup>+</sup> B <sup>+</sup> )(BAA)( <del>A</del> B)AC	( <del>A</del> <del>A</del> D) <sub>0.1</sub> B
	望月	9.075	(AAD <sub>0.2</sub> )	(AC <del>A</del> AC <sup>+</sup> )( <del>A</del> <del>A</del> A)B( <del>A</del> BA)ACC	( <del>A</del> <del>A</del> D) <sub>0.1</sub> A
	瀬尾	9.000	(AAD <sub>0.2</sub> )(ABC <sup>+</sup> )	( <del>A</del> <del>A</del> AD) <sub>0.1</sub> C( <del>A</del> BA)C	( <del>A</del> <del>A</del> D) <sub>0.1</sub> *

表3 演技の内容

順位	名前	得点	開始技から第2シリーズの前まで	第2シリーズから第3シリーズの前まで	第3シリーズから終了まで
1	ボギンスカヤ	10.000	(h <sub>1</sub> kuu)(w <sup>+</sup> →A)	(h <sub>1</sub> h <sub>1</sub> h <sub>1</sub> )	(kuu)(h <sub>1</sub> )*
1	シリバンシュ	10.000	(h <sub>1</sub> kuu)( <sub>1</sub> 西)O(→)	(h <sub>1</sub> kuu)( <sub>1</sub> 西)( <sub>1</sub> 西)	(kuu)
3	ボンタシュ	9.962	(kuu)( <sub>1</sub> 西)( <sub>1</sub> 西)	(h <sub>1</sub> kuu)(kuu)( <sub>1</sub> 西)	(kuu)
4	デュドニク	9.950	(h <sub>1</sub> kuu)( <sub>1</sub> 西)	(h <sub>1</sub> kuu)( <sub>1</sub> 西)( <sub>1</sub> 西)	(kuu)
5	チェン	9.912	(h <sub>1</sub> kuu)(ZZ <sub>1</sub> )	(kuu)(h <sub>1</sub> →)→	(kuu)(→)
6	マフロディエバ	9.825	(h <sub>1</sub> kuu)(h <sub>1</sub> →)(0→)(0→)	(kuu)→→	(kuu)O
	信田	9.837	(h <sub>1</sub> kuu)→(h <sub>1</sub> →)	(kuu)( <sub>1</sub> 西)( <sub>1</sub> 西)	(kuu)(kuu)
	河田	9.400	(h <sub>1</sub> kuu)(ZZ <sub>1</sub> )	(kuu)( <sub>1</sub> 西)	(kuu)(h <sub>1</sub> →)→O
	真田	9.362	(h <sub>1</sub> kuu)→(→)	(h <sub>1</sub> kuu)(→)	(kuu)
	森村	9.200	(h <sub>1</sub> kuu)→	(kuu)(→)(h <sub>1</sub> →)O	(kuu)→
	望月	9.075	(h <sub>1</sub> kuu)	(h <sub>1</sub> kuu)(0→)Z(h <sub>1</sub> →)O	(kuu) <sub>1</sub>
	瀬尾	9.000	(h <sub>1</sub> kuu)(→ZZ)	(kuu)→(h <sub>1</sub> →)!	(kuu)*

表5 難度数, 総加点, 終末シリーズの難度と加点, 総難度点と平均点

名前	得点	D	C	B	A	総加点	終末シリーズ難度	総難度点	総難度平均点
ボギンスカヤ	10.000	2/1	2/-	3/-	4	0.3	D <sub>0.1</sub>	5.6	6.73
シリバシュ	10.000	2/1	4/1	1/1	8	0.7	D <sub>0.1</sub>	7.2	
ボンタシュ	9.962	4/-	1/-	3/-	9	0.8	D <sub>0.2</sub>	6.8	
デュドニク	9.950	3/-	1/-	3/1	12	0.6	D <sub>0.1</sub>	7.0	
チェン	9.912	3/-	1/2	3/-	11	0.5	D <sub>0.1</sub>	7.6	
マフロディエバ	9.825	3/-	1/-	2/-	12	0.8	D <sub>0.3</sub>	6.2	
信田	9.837	2/-	3/-	2/1	8	0.3	D <sub>0.1</sub>	6.2	6.47
河田	9.400	3/-	-/1	4/1	10	0.4	D <sub>0.1</sub>	7.0	
真田	9.362	3/-	2/-	1/-	10	0.5	D <sub>0.1</sub>	6.0	
森村	9.200	2/-	2/-	3/2	9	0.3	D <sub>0.1</sub>	6.6	
望月	9.075	2/-	3/1	2/-	9	0.3	D <sub>0.1</sub>	6.6	
瀬尾	9.000	3/-	2/1	2/-	7	0.3	D <sub>0.3</sub>	6.4	

表6 何度の総数, 総加点, 終末シリーズの総加点と平均

		D	C	B	A	加点	終末シリーズ加点
入賞者	難度	18.0	11.5	15.5	56.0	3.5	0.9
	平均	3.0	1.92	2.58	9.33	0.58	0.15
日本選手	難度	15.0	13.0	15.5	53.0	2.1	0.5
	平均	2.5	2.17	2.58	8.83	0.29	0.08

表7 アクロバットシリーズ, 体操シリーズ, ミックスシリーズ

名前	第1シリーズ	第2シリーズ	第3シリーズ	体操シリーズ	ミックスシリーズ		
ボギンスカヤ							
シリバシュ							
ボンタシュ							
デュドニク							
チェン							
マフロディエバ							
信田							
河田							
真田							
森村							
望月							
瀬尾							

表8 アクロバットシリーズ, 体操シリーズ, ミックスシリーズの難度点, 加点

	アクロバットシリーズ						体操シリーズ		ミックスシリーズ	
	第1シリーズ		第2シリーズ		最終シリーズ		難度点	加点	難度点	加点
	難度点	加点	難度点	加点	難度点	加点				
合計	8.00	1.40	10.00	1.00	5.00	0.90	7.40	0.10	9.40	0.40
平均	1.33	0.23	1.67	0.17	0.83	0.15	1.23	0.02	1.57	0.07
合計	7.20	1.20	8.00	0.40	4.80	0.50	5.60	0	4.20	0
平均	1.20	0.20	1.33	0.07	0.80	0.08	0.93	0	0.70	0



う意味である。D<sub>0.2</sub>, C<sub>0.1</sub>と示してあるのは、技に対して加点がついているということである。これは国際体操連盟が決定し、規則集に示されている。( )<sub>0.1</sub>, ( )<sub>0.2</sub>と示しているのは、シリーズに対して加点がついていることを意味する。D<sup>✓</sup>の<sup>✓</sup>は、格上げのDを意味する。格上げというのは、基の技はCであるが、組み合わせによりCがDになったことをいう。従って表1の難度と異なる場合もありうる。選手によってそれぞれ異なった難度であった。全体的に日本選手の方が総数が少ないように思えた。表5は、各選手の難度数、総加点、終末技の難度とその加点総難度点とその平均点を表したものである。2/1Dと示してあるのは、2つの単独Dと、1つの格上げDを演技していることを意味する。3-/Dの-は、格上げのDがないということの意味する。終末シリーズ難度でD<sub>0.2</sub>と示したのは、Dで両手をついたりその他の失敗により0.25以上の減点があり加点の0.1がとれなかったことを意味する。難度、加点の多

少は、順位と比例していなかった。表6は、入賞者と日本選手に分類し、各々の難度の総数、総加点、終末シリーズの加点と平均を表したものである。Bは同数であったが、C以外は全て入賞者の方が高い値を示していた。特にDの総数と加点の差は大きかった。表7は、種目特有の要求であるアクロバットシリーズ、体操シリーズ、ミックスシリーズがどの技で構成されているのかを表したものである。アクロバットシリーズにおいて入賞者の方が組み合わせに工夫がみられていた。第3シリーズは同技が多かった。体操シリーズではシリバシュの(2P)が工夫もあり難度も高かった。ミックスシリーズでは、入賞者の方が、多くのシリーズをとりいていた。表8は、表7を入賞者と日本選手に分類し、難度点と加点の合計と平均を示したものである。全てのシリーズで入賞者の方が高い値を示していた。特に体操シリーズとミックスシリーズでは、日本選手の加点は0であった。表9は、入賞者と日本選手に分類し、

表10 演技のコース

ボギンスカヤ		デュドニク		信田		森村	
シリバシュ		チェン		河田		望月	
ボンタシュ		マフロディエバ		真田		瀬尾	

D, C, B, Aの難度技の頻度を表したものである。体操競技の理想である伸身姿勢での宙返りD (D) を行ったのは入賞者だけであった。又後方屈身2回宙返り1回ひねり (E<sub>u</sub>) においては、入賞者が4, 日本選手が1で、入賞者の方が多かった。Cでも加点のついた技を行ったのは入賞者だけであった。表10は、演技のコースを表したものである。選手によってそれぞれ異なったコースであった。直線の動きが多かった。森村を除いては複雑に交錯していた。

#### IV 論 議

体操競技の最高点は10点である。どのような演技をすれば10点満点がとれるのであろうか。まずアクロバットシリーズはスピードがあり、姿勢欠点のないことが要求され、宙返りの高さがあり、着地の安定性があること。加点のある単独のD技を含むアクロバットシリーズが取り入れられていること。工夫されたアクロバットシリーズ, ミックスシリーズ, 体操シリーズがあること。体操系要素の正確さ, 姿勢欠点がないこと。構成が工夫され, 開始技から観客と審判の注目をひきつけて彼らの興味をわかせる, 集中させる。とコルタノフスキーは言っている<sup>4)</sup>。動きと曲が調和し, 芸術性のある演技であること。体操競技は別名芸術体操ともいわれる。と遠藤, 小野<sup>3)</sup>も言っているように, 単調な演技でないこと。演技全体が熟練されていること。以上のことが演技出来れば可能であろう。最近ではジュニア層の活躍が目立ち, タンブリングでは男子に勝る選手も出現しているが, その反面“女性美”に欠けるともいわれている。国際体操連盟では, より女性的な優美さを追求する為に, 技と動きを同等に評価するようになってきた。この女性らしさを表現するのに役立つものの1つとして音楽がある。男子にはないこの音楽は演技をより華やかにみせるための大切な役割をはたしている。従って選手の個性にあった曲を選ぶことが大切である。以上の観点から入賞者と日本選手の1人づつを比較していくことにする。1位のボギンスカヤはラテン系を選曲し, 彼女にしか出来ないような個性的な表現

力で, みている人に何かを訴えているような演技であった。身長が高いためダイナミックさを感じさせた。アクロバットの第1シリーズで (M<sub>D0.2</sub> E<sub>u</sub>), 第2シリーズで (M<sub>C</sub> E<sub>u</sub> M<sub>B</sub>), 第3シリーズで (M<sub>D</sub> E<sub>u</sub>) を演技し, 第2, 第3シリーズに技のもの足りなさを感じるが, 姿勢欠点もなく技と動きとの全体のバランスがよくとれ高得点であったと思われる。同点1位のシリバシュはルーマニア国内で人気のあるヒットソングをアレンジし, ルーマニアらしいふりつけをし, 演技の途中からテンポがかわり軽快なリズムにのって, 観客から手拍子が聞かれたほどであった。アクロバットの第1シリーズで (M<sub>A</sub> E<sub>u</sub>) を行い, MからのE<sub>u</sub>で組み合わせの加点をえている。第2シリーズでは (M<sub>SB</sub> E<sub>u</sub> M<sub>D</sub>) を行い, E<sub>u</sub>できりかえしによる組み合わせの加点をとり, 第3シリーズでは (M<sub>D</sub> E<sub>u</sub>) でボギンスカヤと同技であったが全てのシリーズで加点をとっていた。体操系で (E<sub>u</sub>), (E<sub>u</sub> E<sub>u</sub> E<sub>u</sub> E<sub>u</sub>) を演技し, C<sub>0.1</sub>を含んだシリーズを2つもとり入れていたのは彼女だけであった。高難度のアクロバット系と体操系技をとり入れ, 動きとマッチし10点が取れたと思われる。3位のボンタシュは, クラシックとポピュラーを調和よくとり入れていた。第1シリーズの (M<sub>D0.2</sub> E<sub>u</sub>) は体操競技の理想である伸身姿勢の宙返りであった。第2シリーズでは (M<sub>D0.2</sub> E<sub>u</sub> M<sub>B</sub>) と1つのシリーズの中に2つのD難度の宙返りを行っている。このシリーズだけでも0.4の加点がついている。その上最終シリーズで (M<sub>A</sub> E<sub>u</sub> E<sub>u</sub>) を演じ, 宙返りを2つとり入れ, 又単独D難度の宙返りを4回入れたのはボンタシュだけであった。動きはかわいらしくていねいに軽快に演技していたが, 少し女性らしさに欠け, 工夫の必要を感じた。加点は最高の0.8あり, タンブリングの強さで高得点が出たものと思われる。4位のデュドニクはクラシック音楽を選曲し, 美しく優雅な動きをみせていた。現在女子体操界の団体戦では, ソ連とルーマニアが争っている。女子のゆか運動特有のダンス系の運動携帯は時代性に大きく左右される特性をもっていると金子<sup>5)</sup>は言っているがソ

連の特徴は、クラシックバレエを基本にし、ルーマニアは、モダンバレエやブレイクダンスを基本に動きを構成している。どちらも個性的であるが、ソ連の動きは気品と優雅さを感じさせる。幼少時からクラシックバレエの基本を習得し、選手になってからも重視しているそうである。デュドニクの開脚姿勢は180°以上あり、手先や足先の姿勢欠点もない。アクロバットの第1シリーズで  $(\overset{A}{\underset{D}{\text{meu}}})_{0.2}$  第2シリーズで  $(\overset{D \cdot 1 \cdot B}{\underset{D}{\text{meu}}})_{0.2}$  きりかえしの加点0.2をとり、これはデュドニクだけであった。第3シリーズでは  $(\overset{D}{\underset{D}{\text{mee}}})_{0.1}$  と平凡に終了していた。デュドニクは細かいところまで神経の行きとどいた姿勢欠点のない、魅惑するような動きで高得点がえられたと思われる。5位のチェンは、ルンバのリズムののってスピーディに軽快な動きをしていた。タンブリンにおいてもつま先までのびており、全体的に美しさを表現していた。ほとんどの選手が2, 3歩の助走からアクロバットシリーズにもっていくがチェンは1歩から行い、最小の力で最大の効果をあげていると思う。その上、 $\text{ee}$ 等の技で完全に閉脚で行い、美しさをみせていた。第1シリーズで  $(\overset{A}{\underset{D \cdot 2}{\text{mmeeu}}})_{0.1}$  を行い、シリバシュと同様に0.3の加点をえている。第2シリーズは  $(\overset{A}{\underset{D}{\text{mmee}}})_{0.1}$ 、第3シリーズで  $(\overset{D}{\underset{D}{\text{mee}}})_{0.1}$  を行い、全てに高さのある宙返りであった。6位のマフロディエバはクラシックを基調に選曲していた。第1シリーズで  $(\overset{D}{\underset{D}{\text{mee}}})_{0.2}$  と伸身姿勢の宙返り、第2シリーズで  $(\overset{A}{\underset{D}{\text{mee}}})_{0.1}$ 、第3シリーズで  $(\overset{A}{\underset{D \cdot 2}{\text{mee}}})_{0.1}$  を行っていた。第3シリーズでラインオーバーがあったが $\text{eeu}$ を行うのは難しく、脚、腰の強さをみせつけた。動きはエレガントさとはげしさをミックスさせてすばらしいものであった。6位のマフロディエバにラインオーバーがあり、0.1の減点をされたが、1位から6位まではわずかに0.175の差であった。信田は9.837をとり日本選手のなかで最も高得点であった。ヨーロッパで人気のある東京タウンという曲をアレンジし、ドイツでの開催ということで観客にアピールしたようである。軽快にリズムカルに演技していた。第1シリーズの  $(\overset{D}{\underset{D}{\text{meu}}})_{0.1}$  は宙返りの高さがあった。

第2シリーズは  $(\overset{A}{\underset{C}{\text{meu}}})_{0.1}$ 、第3シリーズでは  $(\overset{A}{\underset{D}{\text{meu}}})_{0.1}$  を行った。第2シリーズでD難度がはいればもっと高得点になる可能性がある。河田はポピュラーな曲で演技し、第2シリーズで  $(\overset{A}{\underset{D}{\text{mee}}})_{0.1}$  を行い、難度としては満たされているが、全体的に単調で表現力に乏しく9.400に終わったのではないと思われる。真田はある恋の物語をアレンジし、身体の線の美しさを生かし演技していた。第1シリーズ  $(\overset{D \cdot 2}{\underset{D}{\text{meu}}})_{0.1}$ 、第2シリーズ  $(\overset{D \cdot 2}{\underset{D}{\text{meu}}})_{0.1}$ 、第3シリーズ  $(\overset{D}{\underset{D}{\text{mee}}})_{0.1}$  を行い、日本選手のなかでは、一番多い加点で0.5あった。しかし $\text{eeu}$ で脚の開きが大きく宙返りの回転も弱かったためラインオーバーをし、技術欠点の減点が多かった。森村はラテン系を選曲し、のびのびと演技していた。しかし第1シリーズの  $(\overset{D \cdot 2}{\underset{D}{\text{meu}}})_{0.1}$  の $\text{ee}$ で、捻り不十分であった。第2シリーズ  $(\overset{A}{\underset{B \cdot B}{\text{meu}}})_{0.1}$  と3つの宙返りを直接のシリーズで行ったが、基本難度が全てAであるので、盛りあがりに欠けていた。望月は自分のためのオリジナル曲でクラシック調であった。全体にスピード感に欠け、アクロバットシリーズの技も不完全さが目立ち、ラインオーバーもあり、点数が低かったと思われる。瀬尾はポピュラー調で演技し、小さな身体を少しでも大きくみせるように元気のある動きをしていた。第1シリーズ  $(\overset{D \cdot 2}{\underset{D}{\text{meu}}})_{0.1}$ 、第2シリーズ  $(\overset{A}{\underset{D}{\text{mee}}})_{0.1}$ 、第3シリーズ  $(\overset{D}{\underset{D}{\text{mee}}})_{0.1}$  を行い、難度では入賞者に劣らないが、第2シリーズの $\text{ee}$ で回転不足のために着地で前へ出てしまい、最終シリーズの $\text{ee}$ でも着地で両手をつき、大過失があった。跳躍技の開脚度も少なく、姿勢欠点の減点もあったので低得点になったと思われる。以上選手1人1人について論じてきたが、入賞者と日本選手とに大別して述べることにする。表5, 6, 9に示したように10点満点をとる条件から考えあわせると、D難度は入賞者の方が日本選手と比較して3技も多くとりいていた。しかも同じD<sub>0.2</sub>の技でも伸身姿勢で演技するのは理想ではあるが、複雑化した現在の技では困難であるとされているのにもかかわらず、2人が $\text{ee}$ を行っていた。 $\text{eeu}$ も入賞者は4、日本選手は1であった。入賞者の方が困難なD

技を多く取り入れていた。総加点においても入賞者は1.4日本選手よりも多くとっていた。加点のついている技は独創性があり、困難な技であるので、この差は大きいと思う。演技はどんなに途中まで順調に実施されても、最終シリーズで安易な難度では価値が低い。そのことから考えると、入賞者は最終シリーズの加点で0.4日本選手よりも多くとっていて、最後まで難しい技を演技している。このことは表8でも示されているように、アクロバットシリーズ、体操シリーズ、ミックスシリーズにおいて全て難度点も加点も多かった。体操シリーズ、ミックスシリーズでの日本選手の加点は0であった。これも10点満点の条件からはずれている。表10に示したように演技のコースは直線の方が曲線より多く使われていたが、アクロバットシリーズを行うためには長い距離を必要とし、特に対角線を多く使うのでこのような結果になったが、演技全体の盛り上がり考えた時、曲線もより多く使用し、金子<sup>6)</sup>も言っているように12m四方のゆか面を充分に使って演技することが望ましいと思われる。

入賞者と日本選手を比較してきたが、難度、加点共に日本選手は劣っていた。動きは、個人差はあるが表現力に少しかけているように思えた。みていて単調で、あまり面白さを感じさせなかった。一生懸命に演技しているが、それがかえって余裕を感じさせなかった。手先、足先、顔の表情も研究し、みていてひきつけられるように演技出来ることが望まれる。今後日本の競技力向上をめざすためには、一番めに身体づくりが大切であると考えられる。年令の低いうちに、柔軟性、調整力を身につけ、脚力、瞬発力、強い筋力をつけるべきである。動きではクラシックバレエの基礎を身につけ、姿勢欠点のない、美しい動きをし、速い足さばきで動けるようにする。これはゆか運動に重要である、スピーディにリズムカルに演技するための大切な役割りを果たすと考えられる。身体づくりが出来たら技を習得し、10点満点の条件にそって完成させていけばよいのではないか。完成したら試合の実施にあたっては絶対に失敗をしないで演技

出来るよう熟練性を身につけ、精神力、集中力を高めていくべきであると思う。しかし女子体操選手の若年化が進み、現状の日本の教育体制では困難なことが多い。その上に外国では、国のバックアップが強く、これにうちかかっていくにはさまざまな問題点があると思う。今後ますます体操界が一致協力して眼前のことにとらわれず、日本全体が共通理解をもつ指導方針、技術体系、指導体制を確立していくことが大切であると思われる。

## V 結 論

1989年の世界選手権大会におけるゆか運動の入賞者と日本選手の演技内容を比較検討したところ、次のことがわかった。

- 1) 10点満点をとったボギンスカヤ、シリバシュは10点をとるための条件にあっていた。すなわちボギンスカヤは個性的な表現力あふれる動きに高難度のシリーズ技を演技し、シリバシュは高難度の技と体操系のシリーズのすばらしさ、リズムカルな動きで、技と動きの調和がとれていた。
- 2) 日本選手のなかでは信田が9.837をとり、今後の日本にとって高得点をとるための指針が出来た。
- 3) 入賞者の方が高度なDを多くとり入れていた。
- 4) 入賞者の方が加点が多かった。
- 5) 選手にとって一番苦しい最終シリーズの盛り上がりで、入賞者の方が加点が多く、高難度で終了している選手が多かった。
- 6) 体操シリーズ、ミックスシリーズで入賞者は加点があったが、日本選手はなかった。
- 7) 日本選手は実施での過失が多く得点がのびなかった。
- 8) 必ずしも難度を多くいれている方が高得点とは限らず、技と動きが個性的で調和がとれていれば高得点をとることもありうるということがわかった。

## 参 考 文 献

- 1) 日本体操協会 ビデオテープ 日本体操

- 協会 1989
- 2) 国際体操連盟 女子採点規則集 1989年  
度版 日本体操協会 1989
- 3) 遠藤幸男・小野清子 体操競技をみるた  
めの本 同文書院 p. 136 1981
- 4) A. コルタノフスキー著, 西順一・山本  
斌訳 ゆか運動ソ連体操の技法 ベース  
ボールマガジン p. 11 1972
- 5) 金子明友 体操競技のコーチング 大修  
館 p. 69 1973
- 6) 金子明友 体操競技 講談社 p. 28  
1978